

# 方言詩人 伊奈かっぺいさん

←1面からつづく

青森に根ざし、青森放送(RAB)の社員とタレントという二重生活を続けた。東京への移動は長時間かかるが、伊奈かっぺいさん(76)には「サラリーマンをちゃんとやった上で芸能活動で遊んでやる」との思いがあった。「地方で暮らし、サラリーマンだったからこそ、庶民感覚を忘れないで方言で言葉遊びができた」とも振り返る。

今でこそ地方出身を売りにするタレントは多いが、その先駆けと言える存在だ。かっぺいさんは、自身が1970年代後半〜80年代に活躍する以前のテレビやラジオの出演者についてこう語る。

「田舎者と思われたいから、地方出身であることを一生懸命隠していた。方言を使っちゃいけないのが当たり前だった。私がテレビやラジオに出た頃は『なんで津軽弁で出るんだ?』というのが世間の風潮。でも、誰も使っていないから使っているんだという自負があった」

方言は嫌われるものなのか。方言の歴史に詳しく、かっぺいさんと親交が深い弘

## 地方で庶民感覚忘れず

前大名義教授の佐藤和之さん(67)は説明する。「日本の戦後社会ではしばらく方言が否定され、地方はその風潮を受け入れざるを得なかった。一方、東京に行くと標準語を獲得した人々には、出身地や慣れ親しんだ方言を捨てていいのかという葛藤があった」

### 心のひだを代弁

そんな時代でも、かっぺいさんはテレビや公演で堂々と津軽弁を使っていた。「地元の人で隠しがちだった方言を、気取らずに中央へのアンチテーゼ(反対の主張)となる笑いに昇華させた。『非東京人』の心の中で抑圧されていたものを解放し、心のひだを軽妙に代弁した面もある。東京にこびない姿勢が共感を呼んだ」と解説する。



小室さん(左)と打ち合わせする伊奈かっぺいさん。1980年代に青森でのイベントで共演していた伊奈さん提供、撮影時期不明

でも満足せず、かっぺいさんは青森を盛り上げるために力を注いだ。仲間と共に郷里の方言詩人、高木恭造の命日である10月23日を「津軽弁の日」とすることを発案。一周忌の88年からほぼ毎年イベントを開催してきた。

津軽弁の詩や川柳などを市民から募集したものその一環だ。選者の高齢化などのため

2018年から作品募集をやめて過去の優秀作を紹介する形にしたが、昨年で35回を数える。作品には、庶民の暮らしにある泣き笑いが、方言で味わい深く表現されている。例えば、03年の川柳の部には「生命線 かが(妻)の長けごと 太てえごと」。かっぺいさんの仲間で、前青森市長で青森県議の鹿内博さん(74)は「かっぺいさんも私も津軽弁を愛し、ずっと青森にこだわってきた」と語る。

方言の中でも津軽弁は単語が短く、なまりも強いため聞き取りが難解とされる。でもそれが魅力だと、かっぺいさんは受け止めている。



スライドを使ってトークライブをする伊奈かっぺいさん。青森市で1月、北山夏帆撮影

### いつも自然体

津軽弁をずっと話してきた人間にしてみれば滑舌が悪くなってきているって分らない。『しゃべっちゃいけない』というところに、年齢が重なった

「津軽弁をずっと話してきた人間にしてみれば滑舌が悪くなってきているって分らない。『しゃべっちゃいけない』というところに、年齢が重なった」

コロナ禍の中で老いを強く感じているが、ただでは終わらない。昨年6月には「言葉のおもちや箱 伊奈かっぺい綴り方教室」(本の泉社)を出版。コロナをちゃかした作品も収めた。へ「不要不急」

「不要不急」も東京の人がやると地方差別と受け取られかねないが、青森出身という強みをうまく生かしている」と評する。

「不要不急」も東京の人がやると地方差別と受け取られかねないが、青森出身という強みをうまく生かしている」と評する。

「不要不急」も東京の人がやると地方差別と受け取られかねないが、青森出身という強みをうまく生かしている」と評する。

## 迫る

青森放送でCMやラジオ番組のディレクターなどとして働きながら、東北を中心にタレント活動を続けた。方言詩人、イラストレーター、エッセイスト、歌手、俳優……多彩な顔を持ってきた。

50代になると、社内の人間関係の変化などによってストレスがたまってきた。03年、東京での公演の翌朝、めまいがした。青森に戻って病院に行く

「1日1回は笑いたい。ガハハじゃなくて、独り言でも相づちを打ってニヤリしたい。最後まで楽しいことを続けたいね」。いたすらっぽく語った。

利き手の右手は動かせないので、病院内の面白いことをメモに取ることはやめなかった。症状は軽度で、リハビリで左手も動かせるようになり、2週間の入院で復帰できた。病に向き合った日々をもかっぺいさんは冗談に変えてしまう。「こうやってしゃべれるのは舌が2枚あったから」

1枚はあの時なくしたけど」07年に青森放送を定年退職し、テレビのレギュラー番組も09年に終了した。二足のわ

「不要不急」も東京の人がやると地方差別と受け取られかねないが、青森出身という強みをうまく生かしている」と評する。

「不要不急」も東京の人がやると地方差別と受け取られかねないが、青森出身という強みをうまく生かしている」と評する。

今回の取材は 後藤 藤(デジタル報道センター) 2005年入社。22年4月から現職。青森支局に勤務していた08年に、伊奈かっぺいさん取材し、交流してきた。